『長恨夢』試論—その「離別」と「和解」の意味を中心に

李建志

はじめに

尾崎紅葉の『金色夜叉』を知らない人がいても、間貫一と鴫沢宮の熱海の別れを知らない人はいないだろう。「来年の今月今夜は、貫一はどこでこの月を見るのだか！再来年の今月今夜・・・十年後の今月今夜・・・一生を通して僕は今月今夜を忘れん、忘れるものか、死んでも僕は忘れんよ！」[1]という名ゼリフは、実際に小説で読んだり映画などで見たことがなくても、どこかで一度は聞いたことがあるに違いない。

しかし、この小説は単に日本文学の名作であるにとどまるものではない。実は朝鮮で、この作品をもとにした翻案小説が書かれているのだ。『長恨夢』というタイトルで新聞連載されたのだが、やはりこれも朝鮮で知らないものがいないぐらい有名なものとなっている。主人公の名前は李守一と沈順愛とかえられているものの、彼らが平壌の大同江畔で別れるシーンは、演劇や映画といった媒体を通じて、朝鮮人の心にしみついているといってもいいだろう。

今回取り上げるのは、原作の『金色夜叉』ではなく、翻案ものである『長恨夢』のほうだ。内容は当然のように紅葉のそれに近いものだが、原作が未完で終わったのとは対照的に、ハッピー・エンドというかたちで結末が付いているため、ここに朝鮮的というべき特徴を見ることが可能に思われるからだ。[2]

ところが、この『長恨夢』については先行研究が少ない。おそらくは翻案小説であるという性質上、朝鮮文学研究の世界では比較的重要視されなかったのだろう。目につくものとしては、慎根縡氏の「『金色夜叉』と『長恨夢』に反映された社会意識」[3]と崔元植氏の「『長恨夢』と慰安としての文学」[4]を除くと、李在銑氏の「翻案小説考」[5]や、権寧敏氏の「一斎趙重桓の翻案小説」[6]のような、いわゆる〔翻案小説論〕に限定されてしまう。

この中でも特に慎根縡氏の論文は、『長恨夢』の構造を分析するという本格的な研究ではあるが、その構造を〔三角葛藤〕としてのみ考えたり、『長恨夢』にあらわれた〔高利貸し〕が朝鮮の社会に与えた影響という部分に重心をおいており、作品自体が持っている特殊性に対する考察は等閑視されているという感がある。

そこで今回は、あまり学問的なメスが入っているとは言い難いこの小説の構造を読み解くことを目標とし、その朝鮮的な思考方

式に迫っていこうと考える。

1 『長恨夢』の問題点

まずはじめに、『金色夜叉』と『長恨夢』がどんな内容の小説なのか、説明していこうと思う。

『金色夜叉』は、すでに述べたように間貫一と鴫沢宮を中心とした話だ。貫一は早くに父を失い、父と縁のあった鴫沢隆三に扶助してもらっている身分だ。いま貫一は高等中学に通っているのだが、鴫沢家には一人娘の宮がおり、篤学な貫一を婿に迎えようとまで考えている。ところが、宮をみそめた富豪の息子・富山唯継が彼女を嫁に欲しいという。鴫沢家では悩んだ末、貫一ではなく富山に娘を嫁がせようとする。話を聞いた貫一は、宮の本心をただそうと、彼女が病気療養にでている熱海に向かう。しかし、結局は別れる羽目になり、その後彼の行方はわからなくなる。実は彼は高利貸しの鰐淵直行の手代となっていたのだった。彼の周囲には、やはり高利貸しで美しい女性・赤樫満枝がおり、彼に思いを寄せている。彼女は還暦を過ぎた高利貸しの赤樫権三郎の歳の離れた妻で、元は貧乏士族の娘だった。彼女は貫一に言い寄るが、彼はなかなか応じない。借り手から恨みを買い、暴漢に襲われた貫一は入院するが、そのとき鰐淵の家はやはり恨みを買った老婆に火をつけられ、死んでしまう。そして貫一は財産を引き継ぎ、高利貸しを続ける。また富山に嫁いだ宮も彼の居場所を偶然に知り、彼に赦しを請う手紙を送る。しかし、彼は全く応じようとしない。彼の家に直接訪れても、つれない素振りをしてしまうため、宮は精神に異常を来してしまう。

以上が大体の筋であるが、未完であるためこの先どういう展開が予定されていたのかわからない。これに対して、『長恨夢』はどういう話になっているのだろうか。

早くに父を失い天涯孤独の李守一は、父と深い縁のある沈澤に援助を受けながら育った。彼は人格もよく、篤学な人なので沈澤は彼を一人娘の沈順愛と婚約させ、李守一が高等学校を卒業したら結婚させようと考えている。しかし、金山銀行の経営者である金埜淳の息子・金重培が順愛に結婚を申し込むことで状況は一変する。彼は金山銀行平壌支店の支配人であった。順愛の気持ちを知ろうと守一は彼女が病気療養している平壌まで赴くが、結局順愛は金重倍をえらんでしまい、守一は家を出て高利貸しの金正淵のもとで仕事をするようになる。彼には崔萬慶という女性高利貸しがいいよるが、彼はとりあわない。萬慶は老齢のチレマンという西洋人高利貸しの妻である。一方、順愛は金重培と結婚したのだが、自分が金重培を愛していないことを悟り、深く後悔する。そして金重培とは寝室をともにしないことに決めると、金重培も玉香という妓生を妾にかこってしまう。金重培といい争って家を出た順愛が大同江で自殺をはかるが、偶然居合わせた白楽観に救われる。彼は守一の高等学校時代の友人であった。そして病気になって金重培の家を出ることになった彼女は、火事になって死んだ金正淵夫婦の財産を継いだ守一の家を訪ねるが、守一はあくまで冷淡だ。その後、郊外にある清涼菴という庵に休養に行った守

一は、そこである男女に出会う。その女が金重培の妾・玉香であり、一緒にいる恋人（崔元甫）と心中しようとする。守一は彼らに三千円の金を与えて助けてやるが、その時金重培が順愛と離婚したというわさを聞く。家に帰った守一は反省し、高利貸しを辞めることにする。また、順愛が後悔しているという話を信じて、彼女と結婚し、一緒に社会事業をはじめることを誓う。

もうわかることだろうが、内容は完全な一致を見せていない。特に、後半部分は原作が未完であるのに対して、『長恨夢』は独自の展開をする。まず、宮とは違い順愛は金重培と結婚はしても寝室をともにしない決心をし、さらに離婚までしてしまう。また、守一も他人を助けるためにお金を出すなど、貫一とは違った性質を持っている。これは、単に結末が違うだけ（未完小説を完結させただけ）とはいえないだろう。

前出の慎根縡氏の論文では、結末部で守一と順愛が結婚することなど、両作品の差異点を挙げている。[7]しかし、この論文では全体の構造を〔三角葛藤〕であると一般化しているし、またその分析も「高利貸し」が朝鮮の開化期に与えた社会的な影響の方に論文の重心が寄っているため、やはり作品論としては表面的な印象を受ける。

一目見ただけでもわかるとおり、この『長恨夢』という小説は謎の多い作品だ。例えば、沈順愛が金重培と結婚したのにも関わらず寝室をともにしないなどは、実際にはあり得ないことだ。また、李守一は門閥家出身であるのに、なぜ順愛に裏切られた後も独身で通すのだろうか。朝鮮のイエ制度を考えれば、彼は結婚し男子をもうけることで家系を守り、自分の祖先を守ることになるのだから、彼のとった行為は、むしろ彼の亡き父に対する〔不孝〕ともいえるのではないか。以上のような観点（イエの問題など）でみるとき、『長恨夢』という作品を理解しようとするならば、朝鮮文学の脈絡で検証することが要請されることが知れるのではないだろうか。なぜなら、このような朝鮮社会において非現実的ともいえる行動をおこす主人公の李守一も沈順愛もまぎれもなく朝鮮人であり、かつこの物語が朝鮮社会で人口に膾炙されるほど受け入れられているという事実があるのだから。もちろん『長恨夢』は『金色夜叉』を模倣していることは確かだが、この小説が朝鮮人の共感できない外国小説の翻案としてのみ入ってきたのならば、こんなにも支持されることはなかったと思われるのだ。

このような疑問に対して、三枝壽勝氏は次のように答えている。

儒教社会である韓国で、普通の家庭人が結婚後に逃げ出して他の人と結婚するということは絶対許されないことで、これはあり得ないストーリーです。主人公が『春香伝』の春香のように妓生（キーセン）だったり、酒場の女性だったら問題にならないのですが、普通の家の女性だったら絶対許されないことです。現在でもよく思われません。ですから、このような小説は今で言ったらポルノ小説以上に社会問題になったはずだと思うのですが、1913年に非難もされず受け入れられているわけです。私もはじめは変だと思いました。

そこでよく読んでみると、この物語は非常に奇妙なのです。主人

公の女性は、結婚したその日からほとんど別居状態のようなもので、実際には夫婦関係は一切ないということになっているのです。これはとても不自然な設定ですが、そういうストーリーに仕立てなければいけなかったということは、やはり朝鮮社会の現実を考慮したからでしょう。

『長恨夢』は一見すると日本の『金色夜叉』をただ単に翻訳しただけに思えます。しかし、それだけでは今言ったような問題点がいろいろ出てくるので不自然ではありながら、朝鮮で受け入れられるような工夫がいろいろなところに凝らされていたということが言えるのではないでしょうか。このように、朝鮮社会で抵抗のない設定をしているおかげで、主人公の悲しい運命に読者は心おきなく同情し共感し得たのだと思います。[8]

ここに指摘されているように、『長恨夢』を研究しようとするのなら、その研究成果はこの「凝らされた工夫」とはなにかに対する答えでなければならないだろう。では、次の章からはこの作品に隠れている構造を考察しつつ、この「凝らされた工夫」を明らかにしていこうと考える。

2　＜沈順愛＞をめぐる問題

沈順愛ははじめから、李守一を＜愛＞していたのではなかった。むしろ自分を高く評価されようと考える狡猾さまで見られる人物だ。

順愛も守一をいちばん愛している。しかし、守一が順愛に向ける気持ちには及ばないだろう。

順愛は自分で自分の容姿が美しいことを知っているわけだ。おおよそ世の中で、男女を問わず自分の顔が美しいか、美しくないかということをどうして知らないであろうかと思うのだが、しかし心配するところは自分の美しさを甚だしく信じていることだ。

順愛は自分の美しさがどれほどの価値を持っているのか自ら見当をつけている。[9]

沈順愛は自分の美しさを〔価値〕として考えていたようだ。女性が自らの美貌を〔商品価値〕としてとらえることは、決して珍しいことではない。いや、むしろありふれたことだといっていいだろう、近代社会においては。例えば、岩井克彦氏は『ベニスの商人』から「資本主義」を見るのだが、そこには次のような一節がある。

「おれの娘が！おれの金が！おれの娘が！・・・おれの金だ、おれの娘だ！・・・娘を・・・金を！」、「娘だ、金だ」、娘と金、金と娘、娘＝金、金＝娘－シャイロックの叫びと子供たちのはやし声によって、この二つの存在は完全に同一化されることになる。すなわち貨幣はジェシカであり、ジェシカとは貨幣そのものなのである。いや、ジェシカがトリックスターそのものであるならば、ここにわれわれは、『ベニスの商人』の劇のなかで神出し鬼没するトリックスターの究極的な存在形態を見いだしたことになる。トリックスターとは結局流通し交換を媒介する存在としての「貨幣」にほかならないのである。[10]

岩井克彦氏はこのあとに「貨幣とは蓄蔵されているかぎり、何

も産まぬ石女である。それは、『これ以上の自分を、と望みを高め』ぬ静態的な存在にすぎない。」[11]と語る。

すでに見たように、沈順愛は自分の美しさを発見して、それを〔価値（＝資本）〕として認識する。そのとき沈順愛には、李守一が自分の〔価値〕に見合う男性とは思われなかった。金重培は銀行を経営する財産家の息子であり、その銀行（金山銀行）平壌支店の支配人だから、貨幣を融資してお金を稼ぐ人物だとひとまずはいえる。沈順愛が金重培のもとに嫁に行くことになった経緯も、このような側面から考えると順愛（＝貨幣）が自分の〔価値〕を最大限に評価してくれるひと（金重培＝銀行）を探し当てたという見方がされるべきだろう。

しかし、すでに述べたように順愛は金重培とは寝所をともにすることを拒否する。

> 結婚式をとりおこなう日にも、顔には花嫁の化粧をし、花嫁衣装で結婚式場に立ち、金重培と二姓之合（婚礼―筆者）の大礼に至るときまでも、胸の中では自分が金重培の妻だという気持ちは少しもなく、しかし、父母の言いつけに背きがたくてこのようになったが、うわべではたとえ承諾したようであっても心までは断じて承諾すまいと決心した。（中略）たとえ身はなにかあやまちでこの場にうずめられたが、私の心と私の身体はここでゆるすまいと舌を噛んで誓ったゆえに、座右とかこつけて、金重培に身をゆるさないで三、四年の間すごしているが、固く決めた気持ちは完全に果たされていた。[12]

朝鮮では儒教的価値観から、先祖の家系を守る義務がある。それは何故なのか。儒教的な価値観での「孝」とは単に親に対するだけのものではなく、「祖先崇拝・親への敬愛・子孫の存在という三者を一つにした生命論としての孝」であり、それは「死の恐怖・不安からの解脱に至る宗教的孝」を意味するからだ。[13]金重培は金埜淳の一人息子だから、必ず子供をもうけなければならない立場にたっている。彼が金山銀行平壌支店支配人であるという事実も、彼が父の後継者として生きていかなければならないことを証明している。ところが、子孫を残すことで彼の「孝」は全うされるが、もしもこれができなければ、彼は「不孝者」ということになってしまう。

翻って考えてみよう。妻となっても身体は許さない順愛は金重培の〔イエ〕では「石女」だといっても過言ではなく、銀行家のような資本家が利益とならないモノ（＝「石女」のような死蔵される貨幣）に対して興味を失うように、子供を産まない妻＝石女にも関心がなくなるのももっともなことだろう。当然、金重培は、子孫を残すためにもほかの女性にはしるだろう。「石女」になった妻、蓄妾する夫、これは必然的な因果関係によって展開されるストーリーだ。やがて、金重培は玉香という妓生を妾にしようとするのだ。

ところで、ここに一つ理解しにくいところがある。なぜ順愛はわざわざ「石女」になったのかという疑問だ。彼女はもともと自分を〔価値（＝資本）〕として考えており、これを全うしたとき（自分を高く売りつけたとき）に、急に「私の心と私の身体はここで許すまい」と思うようになったのはなんでなのだろうか。こ

れを知るべく、まず順愛と金重培の結婚はどのように決まっていったのかのぞいてみると、次のような叙述が目につく。

> ある日、沈澤の家には茶洞に住む金召史がやってきた。金召史と沈澤の夫人は夫の妹とお兄さんの奥さんの関係になるので、俗にいうところの兄嫁と妹になる。（中略）金召史は話し合いをしたいようだが、順愛が横にいることを引け目に感じ、静かな隙を待っているようすであったが、だんだん日が遅くなっていくので、仕方なしに金召史は横に座っている順愛を振り向いてみて「ねぇ、おまえは向こうの部屋にちょっといっていなさい。おまえのお母さんとだけ静かに話したいことがあるから」順愛は返事をして立ち上がり、出ていきながら考えた。[14]

この部分は、注意してみないとそのまま過ぎてしまうほどに自然な流れの文章だ。しかし、筆者はこのくだりには重要な問題が潜んでいると考える。なぜならば、この場面は、結婚問題を相談しに来た金召史が沈順愛に「静かに話したいことがある」といって順愛を追い出すところであり、順愛も「返事をして」素直に出ていったからだ。この直後、彼女は向こうの部屋に行くふりをして、部屋の中で交わされる言葉を聴いていたのだが、その話が金重培と沈順愛の結婚問題であったため、順愛の「顔がひとりでに赤らんだ」。

さて、そうすると順愛は自分の結婚問題を金召史と父母の手に完全にわたした計算になるのではないだろうか。引用文を見ればわかるように、金召史が順愛に縁談を持ってきたとき、抵抗どころかむしろ自分の結婚に対して〔主体的な権利〕を親戚に過ぎない金召史にすべてまかせてしまった。順愛のこのような結婚に対する姿勢がいっそう明確にあらわれた一文がある。順愛と金重培が実際に結婚するようになったが、そのとき沈順愛は「父母のいいつけはは逆らいがたいので、どうするか決断しがたい身体で、肉屋に入る牛の心境で（気の進まない状態をあらわす言葉―筆者）を父母のするとおりまかせておいた。」[15]という。この結婚で、沈澤夫婦と金召史は財産家と縁を結ぶために娘（＝資本）を金重培に売り、金重培も順愛から利益（＝子孫）を得ようとするという図式が見て取れるが、逆に考えると順愛はただ〔モノ〕として扱われるのであり、〔主体性〕をほとんど放棄した人間となってしまうのである。[16]だから、順愛は自ら自分の〔主体性〕を捨て、金重培のもとに嫁にいったといえるだろう。

〔主体性〕のない〔モノ〕となってしまった沈順愛は、自分が李守一を愛していることを悟る。すでに引用したように、順愛は「守一をいちばん愛している」と認識している。沈順愛はそのときまで自分の〔商品価値〕に自信があり、かつそれを認められたがっていたから、〔選択〕をすべて他人に任せてしまい、金重培の〔イエ〕に入った。ところが、実際に家庭婦人になってみると「いちばん愛している」人＝李守一が恋しくなったのだ。順愛が結婚したときが「四月十日」で、李守一と沈順愛が大同江で対面したのが「三月十四日」だから、これは守一が行方不明になって一ヶ月にもならないときのことだ。[17]いわば、その間は〔愛の対象〕を失った状態であり、前述のように順愛には自分の〔主体性〕もなかったのだということを考えあわせれば、沈順愛の意識

に二つの〔不在〕（〔主体性〕と〔愛〕を失ったこと）が一度に生起したという事実を知ることができる。この〔不在〕が沈順愛を再び〔主体性のある女性〕へと導いていったのではないだろうか。

一夜のうちに守一が忽然と姿をくらましたあとで、沈澤の一家では、いうならば徒に気をかけてきたものをとられてしまったような気もしたが、一方で考えると家族として守一のために心配しないではいられない。しかし、父の沈澤よりも、また母よりも順愛の心配はいっそう甚だしかった。順愛が心配するのは、単に捨てがたい夫を古い履き物のように捨ててしまったことを後悔し、やりきれなく思うだけではなく、頼るところもなく気の毒な守一の身を考えると、その身の安否を知りえずに、昼に夜に心配にたえない。はじめには怒ってしばらくの間どこかに行ったとしても、何日か経ったあとには必ずまた戻ってくるだろうと思い、ひそかに心の中でいらいらと、指折り待たれてやまかった（後略）。[18]

このように、順愛は「（守一の）身の安否を知りえ」ないから、守一に対する愛を再び確認するようになるのだ。ゆえに、〔モノ〕となってしまった順愛は「いちばん愛する」人を再発見し、夫である金重培を拒否し〔愛〕を〔選択〕するという〔主体性〕を再び求めることができるようになったのだ。[19]

3　＜李守一＞をめぐる問題

すでに述べたように、李守一は門閥家の子孫だ。彼は幼いときに父を失い、沈澤の家に身を寄せるようになった。もちろんその恩を有り難く感じているが、順愛が金重培と結婚するようになるや、家を飛び出してしまった。ひとことで言って、李守一のとった行為は恩を仇で返すというものであった。しかし、李守一もはじめから沈澤に反抗しようとしていたのではないのであった。

（沈順愛を金重培のもとへ嫁に出すという話を聞いて）口をつぐんで言葉をなすことができない守一の胸には、分別もなく自分の欲だけを満たす言葉に怒りを押さえられず、叱責することと、詰問することと、説明することがいろいろと胸中に沸騰したが、沈澤は守一の天の如き恩人であり、事実の理非曲直を問わず、どんなことに対してもその言葉には充分に逆らうことはできないだろうと考えて、血が流れるほどに舌を噛み、何も言うまいと決心した。[20]

右のように、守一も恩を知る人間的で正常な男だった。しかし、守一は非人間的で異常な人物になってしまったといえる。後に守一が暴漢に襲われて入院したとき、沈澤がお見舞いに行くのだが、知らない人だと言って無視してしまう。[21]仮に縁を切ってしまったとはいっても、自分を育ててくれた恩人に知らない人だというのは常識的な人間にはできないことだといえまいか。

では、守一が家を出たのは何を契機としたものなのか。それは大同江での順愛と守一の対面劇だったのだろう。そこで順愛が〔モノ〕となってしまったことを悟った守一は、ソウルの沈澤の家にも寄らず姿を消してしまったのだ。

家出した後、守一がえらんだ職業は、『金色夜叉』の間貫一同様に「高利貸し」であった。慎根縡氏は、前出の論文で『長恨夢』

に登場する「高利貸し」を、一九一〇年代の朝鮮の社会相を反映したものとして考え、その成立過程を細かく調べている。しかし、「当時の韓国社会は、高利貸しの問題で甚だしく苦しめられていたので、読者たちは作品にいっそう関心を傾けたのだろう。」[22]というのみで、作品世界での「高利貸し」の機能に対しては突っ込んだ議論がなされていない。そこで本稿では、事実関係についての叙述よりも、むしろ作品分析のためにこの「高利貸し」について考察してみることとする。

「高利貸し」は一九世紀末に日本から渡ってきた商売であるが、一九〇七年には典當鋪（日本の「質屋」）がソウル市内に九八店舗あったという。

（その当時の韓国人は）高利貸しがどれだけ恐ろしいか、質流れの悲しみがどのようなものなのかを判断するいとまもなかっただけでなく、判断する能力もないぐらいすべてが未経験だった。先祖代々農業に依存していたこの国（韓国―筆者）の大多数の人々の場合、経済生活というものを満足に経験したことのある人はほとんどいないのとかわらない実状であった。（中略）まだ年端もいかない若者たちが、一晩の酒代が惜しくて、両親に内緒で家屋文書を持ってでて来て、いくらにもならないお金と換えてしまう事例もあまたあり、不良輩たちが他人の家の家券を偽造して、　これを抵当とする場合もあった。[23]

『長恨夢』が書かれた当時、〔家券偽造〕のような事件が起きるようになっていたということがわかる。作品の中でも、このような事件が、以下のようなかたちで描写されている。

金正淵（李守一が勤める高利貸しの主人―筆者）は、はじめには事実がどういうふうなのか知らなかったが、懲役になるとか、雅男がどうしたとかいう言葉を聴いてはじめて、その年老いた夫人の来歴と事実を斟酌した。その老婦人の息子の李雅男はかつて金正淵の債務者となったが、私書偽造罪で金正淵の訴えによってひと月あまり前に懲役六ヶ月に処されたので、その母親はこのことによって取り乱した気持ちを抑えることができず、ついに狂ってしまった。[24]

李雅男という人がなんのために私書偽造をしたのかはつまびらかではないが、当時は「高利貸し」の業務が庶民には理解されていなかったという先の引用が想起されるような逸話だともいえよう。引用文の直後には、李雅男の母である老婆が、金正淵の家に火をつけて、金正淵夫婦その火事で死んでしまうのだが、このような話からも、「高利貸し」が日常的、正常的な生活秩序を破壊するものとして認識されていたことがわかる。[25]

だから、この小説の中で「高利貸し」は、日常生活と対立するものであり、いわゆる非日常を代表＝代行しているのだ。守一は日常生活を離れて、わざわざ非日常に入り込んでいく。いや、守一は家を出たのと同時に、日常生活も捨て去ったのである。すでに指摘したが、守一は「高利貸し」という〔非日常〕の世界に住む人間だから、病室まで訪ねてきてくれた恩人の沈澤に、知らない人だという〔非正常的〕な言葉を発することができたのであろう。

このように考えると、李守一がどんなことがあっても〔反省＝

後悔〕しないように思える。例を挙げれば、守一が暴漢に殴られて入院までしていたとか、金正淵の家が放火されて全焼することで、自分の主人夫婦が死んだという「物理的力」を加えられても、守一は「高利貸し」（＝非日常）を捨て去らないからだ。

もちろん、李守一に「高利貸し」を辞めさせようという〔力〕としては、このような〔物理的力〕だけではなく、〔精神的力〕もあった。彼に「高利貸し」のような非人間的な仕事を辞めろと忠告する人々の存在がまさにそれである。例えば、金正淵の息子である金道植と、李守一の学生時代からの友人である白楽観は、それぞれ守一に次のように言い聞かせている。

金正淵の家はすでに火炎に包まれ、扉ごとに火花が降り注いでき て、火の勢いをあおる風は止むこともなく、消防隊の力でもうまく抑えることができず、近所の家三、四軒まで燃えたあと、その翌日の朝になってはじめて鎮火した。（中略）金正淵の姿は赤い土と黒い灰のほかにはまた見えるものはなく、しかし強風烈火の中でただひとつ無事に保存されたのは、金正淵の家の中に置かれていた金庫だけだ。開城郡に行き伝道に尽力していた金正淵の息子の金道植は、この時ちょうど地方に伝道をしてまわっている途中であるゆえに、この知らせを即時に聞くことができず、李守一はその日に急いで病院からそこまでやってきた。（中略）（金道植が）守一を見て「それではあなた様も今からは真人間の仕事をして下さい」といい、金道植は悲しい思いと懇切な情理に満ちたようすで守一を目覚めさせるようにいう。「はい、ただお言葉はありがとうございます、しかし今のところはそのまま放っておいて下さい」「どうして、そういうのですか」「今になって再び真人間の仕事をするふりをする必要もありません」・26

（白楽観が）「守一がどうにかなるように、私がお金をたくさん増やして大金持ちになるとしても、こんな状態では到底心を慰めることはできないだろう。病気になったときに薬を飲まないで、毒薬ばかり飲めば、その病気が治ると思うのか。このように、君は薬を飲もうとしないこと同じだね。以前に白楽観の知己であった李守一はそんなに馬鹿者ではなかったのに、今日つぶさに見れば発狂した人だね。異常をきたした人を見て何か言えば効力があるだろうかと思うが、一介の小さな女として発狂までおこすのは名目は友達としてある私の顔が逆にあからむ。おい、李守一、君に人々がみな強盗野郎だと言っているのだが、罪人だとも言っているのだが、または気ちがいだともいっているのが。こんな言葉を聞いても腹を立てる気持ちがないのか、怒気がこみ上げれば私をげんこつで殴るなり、足で蹴っとばすなり自由にしたまえ」・27

引用文に登場するように、「高利貸し」を営む李守一は「発狂した人」だから、一日も早く「真人間の仕事」をしろと忠告（＝〔精神的力〕）を受けた。それほど李守一は周囲の人から〔人間性を失った人〕として認識されていたのだ。しかし、彼は反省をしないで、そのまま「高利貸し」を続ける。

それでは、李守一は反省をしなかったのか。いいや、原作である『金色夜叉』の間貫一とは違い、『長恨夢』では男性主人公が反省＝覚醒をするに至る。自分に〔物理的力〕が加えられても、〔精神的力〕が及んでも覚醒できなかった李守一が、なぜすすんで「高利貸し」を辞め、また沈順愛と結婚して社会事業をはじめ

ようと思ったのか。これは、彼がソウル郊外で妓生・玉香に会い、彼女を助けることを契機に展開されるように考えられる。次章では、この小説の最大の謎である、李守一の覚醒とその根拠について考えてみることとする。

4　李守一の〈覚醒〉に対する考察

今まで李守一が「高利貸し」となったことについて、彼が日常生活自体を捨てたのだと論議してきたが、そうだとすれば彼は完全に「発狂した人」になったのだろうか。一旦この問題について考えてみようと思う。

この小説では、崔萬慶という女性「高利貸し」が登場するが、この人は作品の中でどんな役割を果たしているのだろうか。もともと、彼女は西洋人「高利貸し」であるチレマンの妾であった。チレマンが崔萬慶の父を騙して借金を背負わせておいて、借金の形に娘の萬慶を奪い取ったのだが、彼女が「高利貸し」に適性が合い、その後は年老いたチレマンのかわりに仕事をするようになったという。[28]チレマンが「六十に近い年老いた人」であり、「にわかに中風になって今日までも身体が自由にならず、大小便まで他人の手を借りるように」[29]なったという事実を考えれば、崔萬慶は子供を産むことさえもできないと見なければならないだろう。すると、西洋人の妾になり、その子供も産めない崔萬慶は、朝鮮的な（あるいは儒教的な）〔イエ〕を完全に失ってしまった人物だというよりほかない。彼女は朝鮮社会から完全に排除された者として作品に登場していたのだ。

原作である『金色夜叉』に出てくる赤樫満枝という女性「高利貸し」は、日本人の高利貸しの妾であるのに比較して、『長恨夢』では西洋人を意図的に登場させたといえる。これは余談だが、日本の〔イエ〕には朝鮮のような祖先から子孫へと連なる「生命論」という概念はない。だからもし、息子が生まれなかったらば、養子をとることが許される。このような事実だけ見ても、朝鮮の〔イエ〕が日本のものとは全く違うことがわかるだろう。仮にこの小説が日本小説の翻案だったとしても、それが翻訳ではなく、舞台と登場人物が朝鮮に移されているのだから、このような〔イエ〕問題に対する考察も必要となってくるはずだ。

『長恨夢』の著者である趙重桓は、翻案過程で、このような日朝の〔イエ〕問題に対して自覚がなかったはずはない。彼は崔萬慶を西洋人の妾とすることで、〔イエ〕を完全に失った人物として描いた。彼女はまさに、朝鮮の非日常性を代表＝代行する人間として描かれているのだ。

（崔萬慶が李守一に）「あなたは金正淵氏の家にずっといるつもりですか。いつかはあなたも独立して一人で金貸しをなさるおつもりでしょう」
「あぁ、それはもちろん、そうでしょう」
「今、私になんの資本があるのです。ひとまとまりの金が、少しできてはじめて独立はするでしょう」
崔萬慶は忽然と言葉を止め、何を考えているのか首を垂れ、守一の周衣の結び紐を持って両手でつまんだ。（中略）
「こんなことを申し上げたら、守一氏はどんなふうにお聴きになるかわかりませんが、あなたも一生金正淵氏の家で他人の仕事だけをな

さる考えばかりではなく、一日でも早く独立して生計をたてることをお考えなさい。明日からでも、あなたが独立なさると仰るのなら、私が・・・このようなことを申し上げればですぎたことだと思われるようですが・・・このような女の力で充分にはできるとはいえなくても、あなたの力になるだけは・・・工面して差し上げますから、どうかそうなさって下さい。」

「それは、どんなわけで私みたいな人間に、お金をまわして下さるのでしょうか」

といいながら、守一は萬慶の顔を眺める。

「そのわけを話せというお言葉ですか」

「とうてい私は、わけを知りえないのとかわらないので、どんなにお互い親しく交際しているつもりだといっても、私のような人間に巨額の資本をまわして下さる理由がないはずなんですが、私たちはつきあった情義もそんなに親密でもないのに、私が主人の家から独立すれば資本をまわしてくれるという言葉が、どんなに考えてもその意義を解釈することができないことではないですか。ご飯でも、私たち、食べましょう。」・30

この会話は、料理屋で交わされたものだが、ここで知りえるように、崔萬慶は李守一を単に愛しているのではなく、現在は金正淵の家の使用人である彼を独立さようとする。これを右の論議に沿って解釈するとすれば、崔萬慶が李守一を自分と同じ「完全な高利貸し」にしようとしているのだといえよう。そうなれば、門閥家出身でありながら、近代教育を受けた人物である李守一と西洋人高利貸しの妾である崔萬慶の社会的格差が埋まり、二人の立場はかなり近いものとなるだろう。ここにいたって、崔萬慶の〔愛〕は成就されえるのだ。彼女は、自分の恋愛成就のためにも、二人の間を引き離す〔格差〕の差異を除去しなければならず、だからこそ李守一を「完全な高利貸し」にし、日常生活から全き隔離することでこの「妨害」を克服しようとしたのだ。しかし、肝心の李守一はこれを拒否した。彼は日常生活に完全に背を向けたのではなかったのだと、ひとまずは＜単純化＞できるだろう。

守一が日常生活に戻ろうとする余地が残っているというのは、次の場面からも見て取れる。

（李守一が崔萬慶に）「いくらにもならないお金・・・それならば白楽観があなたのお金を使ったということですか・・・。それならばお金をどれだけもらったんですか」「三千円ほどになります」「三千円・・・それじゃ、そのお金をやったんですか」（中略）「さぁ、そのお金をいつやったんですか。尋ねていることに答えなければ」「わかりません。忘れてしまいました」「そういわずに、早くちゃんと答えて下さい。なんならばそのお金を私がかわりに出してあげよう」「私は、あなたからは、そのお金を受け取らないつもりです」「ともかく、お金だけ受け取ったらいいんじゃないですか」「そのお金はあなたには少しも関係がないのに、なんでこんなふうになさるのですか。また、もしもあなたがかわりに弁済しようと確かに思われるのならば、私はそのお金を受け取らないで拒否してしまいます」・31

崔萬慶は以前に、守一に向かって「少しも関係がない」のにもかかわらず〔資本〕を用立ててやろうといったが、今回は守一が白楽観の借金を自分がかわりに返したいというので、「少しも関係がない」お金だから「受け取らないつもり」だという。一見矛

盾した崔萬慶の行動も、筆者の議論にあわせて考えれば、さほど無理のある話でもないことが分かる。すなわち、白楽観は李守一の学生時代からの友人であり、まさに彼に対して金貸し家業を辞めるように諭す〔日常〕への回帰を促す回路なのだ。だからこそ崔萬慶は李守一が日常生活に戻る機会を奪い取り、非日常＝「高利貸し」に縛り付けて置こうと思ったのだろう。

「高利貸し」が他人の借金を返してやるというのは、よくある話ではあるまい。お金をかして利益を得るのが「高利貸し」の〔属性〕であるからには、李守一が完全な「高利貸し」になっているのなら、右のような場面でも、白楽観を冷たくつっぱねることだろう。しかし、李守一は白楽観が〔友人〕だという理由で、彼を助けてやろうと考えるようになる。李守一が他人の借金を本人にかわって支払ってやるのなら、その行為は「高利貸し」という〔非日常〕的な生活に叛逆することになるといえる。もしそう考えるのなら、彼の提案を拒否した崔萬慶は、李守一が〔友人〕を助けるという事件を媒介にして日常性に戻っていくのを、阻止する役割を果たしていることになろう。崔萬慶はこの小説では、絶えず「李守一を完全な高利貸しにして、日常生活への回路を得ることを阻止する立場」に立っているのだ。

しかし、李守一は玉香と崔元甫という見ず知らずの若い男女を助けてやるために、お金を出してやる。この話は、李守一が「悪夢」にうなされて健康を害したため、「清涼菴」という「人烟」のないところに行ったとき、そこで崔元甫と玉香に出会うことからはじまる。二人が自殺をしようとしていたので、李守一は彼らを助けてやり、玉香の借金である「三千円ぐらい」のお金をだしてやるようになる。[32]この事件を契機として、彼は「高利貸し」を辞め、また沈順愛に会いに行くようになる。

これは、玉香が金重培の妾であったので二人を助けてやろうと思ったといえるが、[33]それにしても李守一は「高利貸し」という職業に逆行するような行為（＝他人の借金を無償で払ってやること）をしてしまうのだ。その後、李守一は沈順愛と和解をするに至るのだが、これは李守一が日常生活に戻ることを意味する。

ところで、李守一が玉香と崔元甫に出会った「清涼菴」は、その名前と彼がそこに向かうときに「洪陵」という地名が登場していることから考えて、現在の清涼里界隈であると類推される。彼がそこに訪れたということは、どんな意味を持っているのだろうか。

玉香と崔元甫の場合も、すでに引用されているように、白楽観と同じく「三千円」というお金が必要とされた。[34]白楽観のときは、崔萬慶という〔妨害〕があり、李守一はお金を出すことができなかったが（あるいは、日常生活に帰る契機を失ったが）、今回はやすやすと彼らを助けることができる。これはおそらく、その場（清涼菴）に崔萬慶がいなかったからなのだが、逆に考えると、李守一が日常回帰をする契機をつかむために、崔萬慶の来られないところまで行かなければならなかったのだととらえることも可能だ。「悪夢」（＝順愛が現れて赦してくれと哀願する夢）にうなされた彼が、清涼菴に向かうとき、李守一は次のように感じる。

人力車の上で毛布と鞄を膝の上に置いて、洪陵の入り口に着くと

きまでも首を垂れて、左右を振り向かないでいたら、忽然と鬱蒼たる松林が道の左右に並び、鼻ににおう草花の香りにはじめて眼をあげて四方を見まわすと、深邃な景色と、ぬっと立つ岩と、甚だしくは空に浮かんでいる雲までも別天地に入り込んだようで、千万種類の憂愁や悩みが一時に消えていくようだが、時々に驚かされることは、山でも、水でも、岩でも、森でも、木でも、すべて夢の中で見た場所ととても似ている。[35]

この叙述では、都会で傷ついた精神を、郊外で癒すというようす、すなわち東大門（ソウルの内外を仕切る境界）を越えてはじめて「首をあげて左右を見まわす」ことができるようになるという。このような部分は、『長恨夢』が朝鮮近代文学成立に貢献していることを示すだろう。都市と郊外の境界が持っている、近代青年の精神の病いと癒しの姿が見て取れる。ここでは詳細に論じることはないが、当時のソウルでは、東大門（そして、おそらくは南大門も）の外に出ればソウル市外（郊外）であり、守一がそこで心を落ち着かせることができたという事実は確認できる。[36]だから李守一は、ソウル郊外の清涼里に出向き、玉香たちに出会ったというのは、意味があるのだ。すでに述べたように、「悪夢」の内容は順愛の哀願なのであるから、おそらくは無意識のうちに彼女を赦したい（日常生活に帰りたい）と思ったのだろう。しかし、ソウルにいれば李守一が「日常回帰」をしようとしても、崔萬慶という〔妨害〕があってできない。だから彼は、わざわざ「東門の外に」[37]出ていってから、玉香に会わなければならなかったのだ。だからこそ、この事件を契機として、李守一は〔覚醒〕し、沈順愛と結婚するようになるのだ。[38]

五　やぶれさる＜富＞～むすびにかえて

「はじめに」で触れたが、崔元植氏は『長恨夢』について、旧小説と近代小説の中間に位置するものとしている。例えば、三角関係について次のように述べている。

『春香伝』（朝鮮の代表的な古典小説―筆者）だけをとってみても、一種の三角関係を扱った小説だ。しかし、この作品が典型的に見せてくれるように、主人公は卞使道（地方長官の意味―筆者）に代表される現実的な誘惑を決然とはねつける。しかし、『長恨夢』の三角関係の新しさは、主人公がその現実的な誘惑にひっきりなしに揺れ動き、結局はそれに屈服してしまうところにある。筆者（崔元植氏）が知る限り、新小説まで含めて『長恨夢』以前の小説には、このような三角関係があらわれていないようだ。[39]

この後、李光洙の『無情』で、主人公・ヒョンシクが、恩人の娘であるヨンチェを捨てて、財産家の娘のソニョンと結婚するということに触れ、それでもヒョンシクが破滅せず、身分の上昇という市民社会の価値観を肯定的にとらえていることから、近代社会を憧憬する「新小説」の流れを汲んでいると述べている。

とても興味深い指摘ではあるが、『長恨夢』に限定して考えた場合、李守一と沈順愛が最後に結ばれるところなどは、『春香伝』に代表される旧小説の言説に回収されてしまっていることになる。しかし、『長恨夢』が『無情』のように「身分の上昇」を肯

定するような結末を迎えず、むしろ近代的な「市民社会」を批判するような終わり方になっていることに対して、なんらの説明も加えられていないといわざるを得ないだろう。一体なぜ、旧小説にはなかった「誘惑に屈服する」人物を登場させた『長恨夢』の主人公たちは、最後には〔道徳的〕になっていくのだろうか。

これを考える前に、多少遠回りではあるが朝鮮に於いての経済観念について整理してみよう。これは、〔ダイヤモンドに眼が眩んだ順愛〕と、夜叉のような高利貸しになった守一が、最終的にはその〈富〉への道を捨てて、社会事業を営むという第二の人生を歩むようになった意味を理解させてくれると信じるからだ。

元来、朝鮮の価値観は「朱子学」に基づくものである。小倉紀蔵氏は、朝鮮を〈道徳志向的〉であるとし、朱子学の〈理〉をもって、その思考方式を分析している。[40]例えば、〈理〉とは天理として唯一かつ純善であり、全存在は天から〈理〉を与えられている。その〈理〉を形而上の原理だとするならば、〈気〉は形而下の素材であり、両者が合体して人間もできる。しかし、これは単なる二元論ではない。すべての存在に、〈理〉と〈気〉はあるのだが、それは〈理〉を〈気〉が蔽っているのであり、その〈気〉が澄んでいれば〈理〉は露出し、逆に濁っていれば〈理〉は露出せず、〈濁気〉に蔽われている状態なのだという。だから、人間でもこの〈理〉を露出させるように(〈気〉を澄ませるように)努力することで、尊敬される人間になれる。小倉氏は、この〈理〉を求める態度を〈道徳志向〉と呼び、前近代においては金銭=富を求める行為は、この〈理〉を求める態度(=〈道徳志向性〉)に悖るとされていたという。

ところが、時代が下り豊かな一般民や奴婢が登場し、お金で両班の身分が売り買いされるようになると、〈道徳なしの富〉によって社会的に上昇しようという状況が横行するようになる。まさにこのようなときに、朝鮮は近代を、そして植民地時代を迎えるのであるが、ここにある〈富〉によって社会的に上昇しようとする態度、あるいは〈富〉を求める態度(=〈利〉的行為)が、〈理〉を求める〈道徳志向〉とは重ならないことはわかるだろう。[41]

こういったことを前提にして『長恨夢』を見ていくと、李守一と沈順愛が〈富〉により幸福になる、あるいは社会的に上昇するという態度が拒否されていることがわかる。仮にこの小説が、庶民の涙腺を刺激する〔メロドラマ〕であるとすれば、作者は当然のように受け手を裏切らないストーリーを編むはずである。つまりは、当時の〈道徳〉に逆らうような話よりもむしろ、一般的に受け入れられている〈道徳〉にこそ迎合するはずである。かくして、沈順愛は金重培の家を出、李守一も「高利貸し」を辞めるのだ。だから、その李守一の覚醒への第一歩になるのが、崔萬慶という〔妨害〕がいないところで、哀れな男女に「三千円」のお金を見知らぬカップルに与えるという、非〈利〉的行為=〈道徳志向〉的行為であったということは、決して偶然ではないはずだ。沈順愛が、紆余曲折は経たものの金重培という〈富〉を捨て、李守一が崔萬慶の誘惑(=〈富〉への誘惑)を振り切るのは、当時の朝鮮社会では、やはり〈道徳なしの富〉に反発するという庶民の意識を映し出してくれるといっていいだろう。

すると、こういうことができるだろう。先に引用したように、

崔元植氏は『長恨夢』を身分の上昇という市民社会の価値観を反映しきれず、旧小説の道徳にならっているというが、これは当時の読者の意識が〈利〉的行為を許容しきれなかったということを意味するのだと。一九一七年の『無情』以後、近代文学で受け入れられていくこの〈富〉というものは、少なくとも一九一三年、そして一九一五年の『長恨夢』発表当時には受け入れられず、ついには敗れ去ってしまったのだ。[42]

さて、この小説の最後の「和解」を、以上のような〈道徳志向性〉だけで解釈するのは、若干無理があるだろう。それでは、登場人物が読者の傀儡に過ぎなくなってしまうからだ。ここにもう一つ、重要な問題が残されているようだ。

紹介したように、李守一は「覚醒」し、昔の李守一に戻って（日常回帰をして）沈順愛と結婚する。沈順愛の父である沈澤は、娘を金重培に嫁に出したとき、「五〇を少し越して」[43]いたから、順愛が金重培のもとを離れたときには（結婚から六年後にあたる）、還暦を迎えていたことだろう。一人娘が婚家で子供をつくらず、離婚までしてしまったのだから、沈澤の家系を継ぐような人物はいなくなる計算だ。沈澤は「不孝者」になるというわけだ。また、李守一も「日常回帰」の機会は得たが、天涯孤独であるが故、彼の〔イエ〕もなくなってしまう危険性を秘めている。「人間性」を取り戻した守一は、〔イエ〕を守るためにも結婚することはずだが、「覚醒」した彼が自分を育ててくれた沈澤の恩を無視し、ほかの女性と結婚するとは考えられない。やがて、二人は元の鞘に戻り、〔イエ〕を守ることになるのだ。

このように考えると、この『長恨夢』という小説は、意外にも近代的な恋愛を扱う作品ではなく、〔イエ〕問題を中心に理解される作品であることがわかる。では、『長恨夢』は、近代的恋愛を全く描いていないのか？

最後に登場した玉香と崔元甫が、心中する直前に李守一が助けてやったという事は以前に述べたが、二人の身分を見ると、玉香は平壌妓生であり、崔元甫は貿易会社の社員であった。相思相愛ではあったが、玉香が金重培の妾になることで、夫婦になる望みが絶たれ、心中することで愛を成就させようと考えたのだ。

言いかえれば、玉香と崔元甫は、金重培との関係を通して経済問題にぶつかり、三千円のお金が必要になったのだが、二人にはそんな余裕はないので、むしろ〈生〉を放棄することで〈愛〉を全うしようとしたのだ。ここに表れたのは、決して〔イエ〕問題ではなく、今のわれわれがよく目にする〈愛〉を追求する青年の姿だ。

また、崔萬慶についても考えてみよう。彼女が「身分」を異にする男性（＝門閥出身の李守一）を愛すべく、彼を完全な「高利貸し」にしようとしたことや、守一が友人の白楽観を助けようとしたときに〔妨害〕をしたという事実については本論で言及した。彼女が〔イエ〕を失った人だということをあわせて考えれば、崔萬慶の李守一に対する気持ちには、〔イエ〕制度を乗り越えようという近代的な恋愛の様相があると見なければなるまい。

では、この『長恨夢』という小説は、朝鮮的な〔イエ〕を継ぐ「孝」のモチーフとともに、近代的な〔愛〕のモチーフによってできた挿話も垣間見ることができる、とても複雑な小説だともい

えるだろう。この作品は開化期の「恋愛小説」として知られる。もちろん話の中に、いわゆる〔近代的恋愛〕を表現する登場人物がいることは確かだが、それが主人公ではなく周辺人物たちであるということ（まだ本格的な恋愛小説ではないということ）は、とても興味深い。朝鮮の小説で、〔近代的恋愛〕が本格的に扱われるのは、やはり李光洙の登場を待たなければならないということが、ここからも確認できるからである。

注

*1 尾崎紅葉『紅葉全集』第六巻（博文館、一九〇四年）、「金色夜叉」前編、一〇二頁。

*2 『金色夜叉』は明治三〇年（一八九七年）から明治三五年（一九〇二年）まで『読売新聞』紙上に連載された。単行本は春陽堂から『金色夜叉前編』（一八九八年七月）、『金色夜叉中編』（一八九九年一月）、『金色夜叉後編』（一九〇〇年一月）、『続金色夜叉』（一九〇二年四月）、『続々金色夜叉』（一九〇三年六月、一九〇五年七月の第七版より「新続編」も含むかたちで出版される）と連続で発行された。

これに対して『長恨夢』は趙一斎の手で『毎日申報』に一九一三年に連載され、その続編は一九一五年にやはり同じ新聞で書き続けられた。単行本は三冊に分けて出版された。本稿では『長恨夢』第一巻（上編）（匯東書館、一九一三年九月）と、『長恨夢』中編及び下編（朝鮮図書株式会社、一九一六年一二月）を使用した。

*3 『韓日近代文学の比較研究』（一潮閣、一九九五年）、四八―九〇頁。

*4 『民族文学の論理』（創作と批評社、一九八二年）、六八―九四頁。ここで崔元植氏はこの小説がでたあとには「新小説」が衰退していくことを挙げ、『長恨夢』が近代小説への橋渡しをする役割を担ったとして、『無情』以後の作品と関連づけて論じている。『長恨夢』を朝鮮文学史上に位置づけようとする意欲的な論攷だといえる。

*5 『韓国開化期小説研究』（一潮閣、一九七二年）、三一一―三三六頁。

*6 『新文学と時代意識』（セムン社、一九八一年）、一一一―一二一頁。

*7 慎根縡、前掲書、五六―六四頁。

*8 三枝壽勝『アジア理解講座「韓国文学を味わう」報告書』（国際交流基金アジアセンター、一九九七年）、二九頁。

*9 『長恨夢』第一巻、二三頁。（拙訳、以下も同じ）

*10 『ベニスの商人の資本論』（岩井克彦、筑摩書房、一九九八年）、引用は筑摩学芸文庫（一九九二年）四四頁。

*11 同書、五六頁。

*12 『長恨夢』中編、二七―二九頁。

*13 『儒教とは何か』（加地伸行、中央公論社、一九九〇年）二二三頁。

*14 『長恨夢』上編、三四頁。

*15 『長恨夢』中編、二六頁。

*16 さらに、『長恨夢』中編、二二頁には「他人のものになった順愛は、決して以前の順愛ではなく、すでに李守一の宝物ではない」とある。

*17 『長恨夢』中編、二五頁。李守一は、大同江で順愛と対決し、順愛が金重培のもとに嫁に行くと聞いたその足で、行方をくらまして

いる。

*18 『長恨夢』中編、二五頁。

*19 『金色夜叉』では、鴫沢宮が間貫一を「いちばん愛している」と表現したりはしない。「宮も貫一をば憎からず思へり。然れど恐くは貫一の思へる半には過ぎざらん。」（前編、三一頁）と叙述されるのみだ。だから、〔不在〕を確認して〔愛〕に思いいたすという筆者の議論とは、若干あわない部分がある。やはり、『金色夜叉』と『長恨夢』は、別個に扱われるべき作品であるといえよう。このような言葉が挿入されるのには、原作とは違い守一と順愛は最後に結ばれるという『長恨夢』の話に一貫性を保たせようという意図がみらる。（この一貫性については、後述する。）

*20 『長恨夢』上編、五八―五九頁。

*21 『長恨夢』中編、八八頁。

*22 慎根縡、前掲書、六六頁。

*23 孫禎睦『韓国開港期都市社会経済史研究』（一志社、一九八二年）、二四一―二四二頁。

*24 『長恨夢』中編、一二九頁。

*25 こういった事情は、『金色夜叉』と全く一致する。間貫一の主人である高利貸しの鰐淵は、やはり債務者で私書偽造の罪を問われて罰金十円、重禁錮一年の刑に処せられた飽浦雅之の母親である狂った老婆に火をつけられて死んでしまうのだ。（「金色夜叉」後編、第六章～第七章の一、四一一―四三六頁。）

*26 『長恨夢』中編、一三六―一四二頁。

*27 『長恨夢』下編、六―七頁。

*28 『長恨夢』第一巻、一〇九―一一一頁。このあたりの筋も、『金色夜叉』とそっくりだ。しかし、赤樫満枝の主人は西洋人ではなく、日本人の老高利貸し・赤樫権三郎であった。（「金色夜叉」中編、一二六―一二九頁。）

*29 『長恨夢』第一巻、一一二頁。

*30 『長恨夢』第一巻、一二九―一三二頁。

*31 『長恨夢』下編、一九―二〇頁。

*32 『長恨夢』下編、一〇〇頁。

*33 『長恨夢』下編、八九頁に「六年前の、平壌大同江辺のかつての夢をまた見ている」という記述がある。おそらく守一は玉香と崔元甫、金重培の関係を自分とすねと金重培の三角関係に重ねあわせていたようだ。

*34 『京城案内』（石原留吉、京城協賛会発行、一九一五年）の付録「諸職工賃金表」（同書、二七一―二七二頁）によれば、当時の人力車夫（朝鮮人）が一日に一円二〇銭、大工（朝鮮人）が一円しか稼げなかったという。三千円という金額がどれだけ大きいか、ここからも斟酌される。ちなみに、内地人（日本人）の場合、人力車夫なら一円四五銭、大工なら一円五〇銭の手間賃をとっていた。

*35 『長恨夢』下編、七〇頁。

*36 『瑤池鏡』（パク・ヨンジン、スムン書館、一九一〇年）には、地方の人がソウルに上がってきたとき、南大門の中にはいると臆病になり、ソウルの人の動作を猿のように真似をするという場面がある。（同書、五八頁）ここからも、プリミティブではあるが、単に田舎者がソウルであがってしまうという意味以上の、境界線の意識が感じられる。

*37 『長恨夢』下編、七〇頁。

*38 この展開は、原作である『金色夜叉』にはないところだ。未完の小説だから、作者の構想はどうであったかわからないが、『金色夜叉』では宮が婚家から出ることもなく、貫一も宮から送ってくる手紙を無視し続ける。

*39 崔元植、前掲書、八四頁。

*40 『韓国は一個の哲学である―〈理〉と〈気〉の社会システム』（小倉紀蔵、講談社、一九九八年）。以下、朝鮮の道徳性については、小倉氏の議論に依拠した。

*41 小倉氏は、これらの〈利〉的行為が「祖国近代化」「自主経済自立」「輸出立国」という〈民族〉としての理〉を付与することに成功したのは、朴正熙大統領だったという。（同書、一六二頁）すると、それ以前はやはり、〈富〉を追う〈利〉的行為は、〈非道徳〉的行為だったということになろう。若干図式的なきらいはあるが、効果的な分析だと考える。

*42 『メロドラマ』（ジャン＝マリ・トマソー著、中條忍訳、昌文社、一九九一年）には、保守的な道徳観を伝達するという役割を担っているとし、次のように記述している。「この保守的な道徳観は国民の軍事的情熱を維持し、それによって政治的、社会的な安定を保ち、さらに美徳を尊重させようとするものであった。」（六七―六八頁）メロドラマには庶民の道徳を守るという性格が隠されているようだ。『長恨夢』で保守的な道徳が勝利するのも、このような文脈で考えるのなら納得がいく。やはり当時の朝鮮には〈富〉を絶対視する道徳観は一般化していなかったのだろう。

*43 一九一五年に出版された安国善の短編小説集『共進会』には、貯蓄と勤労を美徳としてとらえる「人力車夫」が書かれる。安国善が財政の専門家であったことを勘案すると、おそらくは〈富〉に対する観念の変化を促そうとする「教化」的立場から書かれたものと解釈すべきだろう。やはり、〈富〉に対する観念の「ゆらぎ」があったことが、ここからも察知される。なお「人力車夫」については、拙稿「安国善小説集『共進会』に現れた落語『芝浜』の影響」参照。（『比較文学研究』第七一号、東大比較文学会、一九九八年二月）

*44 『長恨夢』第一巻、四二頁。

（この論文は、昨年に韓国で発表されたものに、多少筆を加えて日本語に直したものだ。『恋愛小説とは何か』大衆文学研究会編、国学資料院、一九九八年一二月、ソウル）